アラスカ・インディアンの神話

箕浦 信勝

筆者の現在のフィールドはマダガスカルである。しかし、マダガスカルの言語以外のことに関しては、素人レベルでもほとんど知らない。他方、以前筆者は、大学院生の頃から十年程、アラスカ内陸部のインディアン語、上タナナ・アサバスカ語をフィールド調査の対象としていた。アサバスカや他のアラスカの諸民族のほうは、個々の民族の民族誌を読み散らかしていたし、指導教官、宮岡伯人博士から授業内外で教わった部分もある。専門外の神話であるが、素人レベル以上にちょっとは知っている。ということで今回はアラスカについて書くことにした。

今回参照したのは、Judson（1911）と、Smelcer（2016）である。どちらもキンドル版が二〇一九年二月の時点でアマゾンで入手可能である。Judson（1911）は、アラスカ先住民に関する、米国民族学の初期の偉大な研究者、例えばボアズやスワントンといったビッグネーム達によって学術的に書かれた民族誌の中から神話を選び、（元は恐らくは先住民語と英語の対訳もあったであろうが）英語テクストのほうを、現代人に読みやすいように書き直して纏め上げたものである。扱った民族も、アラスカの二〇個の先住民族（インディアンとエスキモー・アリュートを含む）と、アラスカ周辺の地域のものにわたっている。Smelcerは、出自は先住民ではない白人であるが、アトナ・アサバスカによって養子として迎えられ、既に数十年もアトナであることを自称している。氏のアトナ語能力に関しては、私は知る由もないが、たとえ英語を主体にインタビューしたものであったとしても、アトナの古老から実際に聞き書きしたことは確かである。どちらの本も、先住民語と英語の対訳になっていないことは、言語学徒にとっては残念であるし、またJudsonはご当人の倫理的な規準から、人間と獣の結婚譚を排除しているのが残念である。獣との結婚譚など、日本でも、遠野や岩手南部のオシラサマなどであるものだし、目くじらを立てて排除すべきものでもないと思うが、それがJudsonの選択である。

今回はJudson（1911）の中から、アサバスカ語を話す民族（アラスカに一一民族ある）の神話を選び、Smelcer（2016）で補う。後者を引用していない神話は全て前者に依る。神話には、創世譚、物事の始め、動物が人間だった頃の話などがある。全体が体系を成して、お互いに矛盾のない総体となっているということはない。

「昔々、世界は水で覆われていて地面はなかった。ある家族が大きな筏を作り、動物たちを乗せ、世界を創ろうとした。水の底を見つけようとビーバーに縄を付け水を潜らせたが途中で溺れてしまった。ジャコウネズミも溺れたが、手に少し泥を持っていた。男はその泥を乾かして、それを吹いた。それが世界の始めである」。

「ワタリガラスはカワウソに『お前は水陸両方に棲む』と言った。親友のワタリガラスとカワウソはオヒョウ釣りに行った。ワタリガラスはカワウソに、『お前は常に全方向から風が吹いてくる岬に家を持つ。カヌーに乗った人々が転覆すると、お前は彼らを助け、友人になる。』と言った。それがカワウソビトの起こりである。カワウソに連れ去られた人々を、その友人が取り返してくると、彼らはメディシンマン（≒シャーマン）になった。メディシンマン同士はカワウソの魂を通して、普通の人間には見えなくてもお互いに見ることができる」。

「若い猟師がカワウソが水から上がっていたところを撃とうとすると、カワウソは美しくまた涙を浮かべたのでやめた。次の夏、猟師は美しい女を見つけて結婚した。その女は実は件のカワウソだった」。（Smelcer 2016）

みのうら・のぶかつ　総合国際学研究院准教授　言語学

文献案内

Judson, Katharine Berry, *Myths and Legends of Alaska*, Chicago: A. C. McClurg & Co, 1911

Smelcer, John, *Trickster: Myths from the Aitna Indians of Alaska*, Kirksville: Naciketas Press, 2016